文化的シオニスト、アハド・ハアムの精神的中心

堀川敏寛

はじめに　問題設定と資料

ヘルツルの死後、政治的シオニズムが失敗したという機運のなか、これまでシオニストの間で受け入れられていた真理を再検討し、民族の魂を探求する新たな段階へと入る議論が盛んになった。この十九世紀末期に生じた動きこそ、ドイツ語を話す文化圏で、若い知識人階級の小グループを中心に芽生えた文化的シオニズムであり、彼らは高い教養のあるイデオロギーの正当性を必要としていた。[1] 本稿では、彼らの師であるアハド・ハアム[2]が十九世紀から二十世紀への転換期に述べた「パレスティナは、ユダヤ民族の精神的中心になる運命にある」というスローガンを分析する。この宣言はよく知られており、後のシオニストのみならず、ユダヤ学研究者によっても数多く引用される箇所である。このスローガンの精神性に着目すれば、パレスティナの地という地理性なくして、民族の精神的紐帯は形成可能であるかもしれない。ところが文化的シオニストにとっては、まさに「精神的中心」それ自体がパレスティナであり、それは入植地を求める民族運動ではなく、ユダヤ教と結びついた民族精神の危機を守るためのセンターであることが、

本稿で明らかになる。アハド・ハアムは第一回シオニスト会議への参加を経て、ユダヤ人国家の建設とそこへの移住という考えを強く否定する。なぜなら、後述するように、それでは彼の考えるユダヤ人とユダヤ教の物質的／道徳的な問題が解決されえないからである。ヘルツルは、同化への限界を感じたユダヤ人の居住地確保が目的であり、ユダヤ人独自の国民国家をウガンダに建設することを、彼の著書『ユダヤ人国家』で提案したくらいである。それに対してアハド・ハアムは、政治的シオニズムは、ユダヤ文化が持つあらゆる根元的問い、つまり言語・文学・教育といった広く普及してきたユダヤの知恵を無視していると考える。[3] つまり彼は、ユダヤ性という文化的要素を放棄していることを理由に政治的シオニズムを批判していくのであり、まさにこの点に彼の立場が「文化的」と言われるゆえんがある。またアハド・ハアムは、一方でディアスポラの生を営むユダヤ人は存在すべきであるが、他方で漸次的に入植は進められるべきであるとも考えていた。そこでは農業が鍵となるのだが、なぜアハド・ハアムがそう表明したのか、前記の精神性と併せて本稿で論じたい。

なお、アハド・ハアムはヘブライ語で執筆しており、レオン・サイモン（Leon Simon）によって英語に訳された資料が、現在の国際的研究では、一次文献として用いられる。同じ文化的シオニストでユダヤナショナリズムの道徳的価値を強調したハンス・コーン[4]によって編集された *Nationalism and the Jewish Ethic: Basic Writing of Ahad Ha'Am* (1962) は、主にレオン・サイモン訳による三つのアハド・ハアム論文集 *Ten Essays on Zionism and Judaism* (1922)、*Selected Essays by Ahad Ha-'am* (1912)[5]、*Ahad Ha-Am: Essays, Letters, Memoir* (1946) から抜粋されたものである。編者ハンス・コーンによる *Nationalism and the Jewish Ethic* の序論、レオン・サイモンによる評伝 *Ahad Ha-Am* (1960)、*Selected Essays by Ahad Ha-'am* と *Essays, Letters, Memoirs* のなかでサイモンが書いた序論と解説、最初の

アハド・ハアム研究論集 *At the Crossroads: Essays on Ahad Ha-Am* (1983)、*Jewish History* Vol.4, No.2 (1990) らは、二次文献としてアハド・ハアムの思想を多角的に解釈したものである。また政治的シオニズムと文化的シオニズムとを簡潔に比較しているシオニズムの概説書として、Michael Berkowitz: *Zionist Culture and West European Jewry before the First World War* (1993)、Walter Laqueur: *The History of Zionism* (2003)、Leora Batnitzky: *How Judaism Became a Religion* (2011) を本稿で用いる。ちなみにアハド・ハアム自身が執筆した一次文献は、アカデミズムに根ざした研究論文ではなく、政治的表明を目的とする声明文のようなものである。それは冗長に執筆されたエッセイであり、本人の真意が汲み取りにくい印象を受ける。また筆者が本論考で論じるとおり、アハド・ハアムの思想それ自体が一枚岩ではないため、しばし専門外の研究者によって単純に紹介されるほど文化的シオニズムの全体像は明瞭ではない。それはアハド・ハアム自身の考えが揺らぎ、変遷していたからだと思われる。

一、政治的シオニズムとユダヤ人国家の問題点

アハド・ハアムは、「ユダヤ人国家とユダヤ人問題」(一八九七年) のなかで、ユダヤ人とユダヤ教にとっての現状を「物質的」と「精神的」問題によって、二つに分けて捉える。[6] これは第一回シオニスト会議を不満に思った彼がその欠陥を指摘したエッセイであり、その文体から彼の強い感情や熱意を垣間見ることができる。東欧ユダヤ人は、もっとも基本的な生活必需品を手に入れて安心するため、パンと空気を勝ち取るために、継続的な奮闘が求められていた。つまり東欧は貧しく日々の糧を得るために奮闘する必要性があったのである。他方、西欧は自由の土地であり、物資

的な状態が特に悪いわけではなかったが、アハド・ハアムは、道徳的問題が深刻だったと考えた。[7] その理由は、彼に言わせれば、ユダヤ人はその能力や徳性という点で隣人より劣っているわけではないにもかかわらず、自分たちは劣等人種だと責められている意識を感じていたからである。ノルダウは、これらすべての問題から脱出するためにユダヤ人国家の建設が必要だと、第一回シオニスト会議で述べたのである。[8]

ただしアハド・ハアムは、この論文のなかで、ユダヤ人国家では、物質的問題が解決されることはないと主張する。まず単独の国家が一つの経済単位になることなどもはやなく、今や全世界が一つの巨大な市場であるため、それぞれの国家がそのなかで自らの経済的立ち位置をみいだせるよう奮闘せねばならない。またユダヤ人には、それぞれの国で自由に仕事を探す権利が、ディアスポラの居住地ではアンチ・セミティズムによって制限されている。ただし、パレスティナでは、たしかに生計を立てるための仕事を「探す」自由を得られるだろうが、「見つける」ことができなければ、それは十分ではない。そこからアハド・ハアムは、次のようにユダヤ人国家建設に対して懐疑的な主張をする。

それゆえ狂気と紙一重であるファンタジーだけが、ユダヤ人国家が建設されるとすぐに、何百人ものユダヤ人がそこへ群がり、土地が彼らに適切な物質を提供する余裕がある、と信じることができるだろう。[9]

彼は、仕事を必要とする労働者の量が、パレスティナで供給可能な仕事の量よりも、すぐに増加するに違いない[10]と考え、こう主張した。したがって、たとえユダヤ人国家を建設するとしても、ユダヤ人が少しずつ入植する場合にのみ、それは可能である。[11] このような理由から、ユダヤ人国家の創設によってこの物質的問題が終わるわけではなく、またそれはシオニストのリーダーの力で終わらせるような問題でもない。なぜなら物質的な困窮は、国家が建設されるか否かにかかわらず、ディアスポラの国の経済状況を根本的に変える必要があるためである。この点についてバトニツ

キー（Leora Batnitzky）は、政治的シオニストとして「ヘルツルの考えは決してオリジナルなものではなく、そのほとんどが近代のユダヤ的生活にたいする無知に基づいていた[12]」と指摘する。

このようななかアハド・ハアムは、「シオニズムの真の原理は、もう一つの問題、すなわち道徳的なもののなかで見いだされうるという結論へと、わたしたちは突き動かされる[13]」と宣言し、彼の考えるユダヤ人問題の真意が道徳的危機にあることを論じるのである。彼は「道徳的問題」は西欧ユダヤ人のみならず、東欧にも同じく、異なる形態で存在すると考える。それは西欧の「シオニズム」と東欧の「ヒバット・シオン」（シオンの愛）という違いなのであるが、シオニスト会議のなかでノルダウは西欧のユダヤ人問題しか考えていなかった[14]、とアハド・ハアムは不満を述べる。

まず、西欧では、ゲットーから出たユダヤ人が、自身が住む国の人々の輪に入ろうとしたにもかかわらず、そこで心から受け入れられるという希望が失望に終わったことから不幸であった。そこから西欧ユダヤ人は自民族の間でこそ、充実した完全な生活を送ることができると捉えたのである。彼らは、ユダヤ人国家は離散状態にある者たちの威光を上げるものであり、自分たちがもはや軽蔑されることなく、無視されるような奴隷として他者のホスピタリティーにひたすら頼ることから脱すると考えた。ただしアハド・ハアムは、この考えがイリュージョンに過ぎないと次のように主張する。

> というのも西欧ユダヤ人が必要とする理想は、劣等感意識という自らの道徳的な病気を治癒するために、それを成就することではなくただ追求することだけで十分なのである。[15]

いわば彼らの考えは、劣等感の解消ではなく、それを追い求めるという夢想に近いものに満足していた。アハド・ハアムは、このような「理想」への距離が、より高く、より多いほど、その高揚感はより抜きんでていると、感じていた。[16]

これが彼の評価する西欧型シオニズムの原理とその魅力に隠されているものである。

他方、東欧のヒバット・シオンは、これらとは異なる起源をもち、異なる展開をしている。前述のとおり、東欧ユダヤ人は物質的な悲劇に接していたため、すぐにでも入植地を建設するという具体的行動が求められていた。そのなかでアハド・ハアムは、東欧は西欧とは異なる道徳的悲劇に逼迫しており、それは「西欧のようなユダヤ人問題ではなく、東欧ではユダヤ教が問題である」と主張する。[17] ユダヤ人問題はアンチ・セミティズムに依拠するものであるが、ユダヤ教の危機とは、これまでゲットーのなかで培われ、伝えられてきた文化の危機である。すなわち、

> ゲットーから出たのは、たんにユダヤ人だけではない。ユダヤ教もまた同じく出てきたのである。〔中略〕それは近代文化と接触するところならばどこにおいてもある。[18]

ユダヤ教が近代文化と接触したことは、ユダヤ教の防御をいわば内部からひっくり返したことであり、ユダヤ教はもはや孤立することも、隔離した生を営むこともできなくなってしまった。このような理由で、ディアスポラのユダヤ教は、独自の方法で、自らの個別性を発展することが不可能になっていった。

> ユダヤ教がゲットーの壁から出た時、その本質的なもの、いや、すくなくとも民族の統一性を失ってしまう危機に遭遇したのである。[19]

近代文化との接触は、分散したユダヤ人の国々の数だけ、それぞれ異なる特徴・生活へとユダヤ教が分割されることである。このような分散／分割という危機に直面したこと、それをアハド・ハアムは東欧の道徳的問題として議論したわけである。したがって、〔本論考で後述するところの〕民族精神や精神的中心は、このような近代との遭遇によって分散／分割の危機に瀕したユダヤ教文化の紐帯として、要求されるものである。

二、アハド・ハアム思想の評価

ここからは、ユダヤ人とユダヤ教の問題を考えたアハド・ハアムが、どのような背景から自身の思想を生み出してきたのか、複数の研究者の見解をとおして明らかにしたい。コーンバーグ（Jacques Kornberg）によれば、アハド・ハアムは、スラブ系知識人を感化したJ・G・ヘルダーの文化的民族主義の理論を取り入れることによって、教育者の役割を引き受けた[20]。そこで彼は、ユダヤの民族精神[21]（Volksgeist）の理論を展開する。それは超個人主義的なものであり、彼はこれをユダヤ史のなかで独立した最重要なる原動力であり、全ユダヤ人の想像力の源泉であると考えた。ハンス・コーンによれば、アハド・ハアムの立場は「ユダヤ教が神の啓示による贈り物ではなく、民族精神の創造である」といったもので、それにたいして多くのシオニストたちが同意していた[22]。一方でコーンバーグは、「ユダヤの民族精神は社会倫理を備えている[23]」と解釈する。アハド・ハアムは、その民族精神は、何世紀にもわたる無国家と流浪のあと時代遅れになり、繭のようにタルムード文学のなかに閉じ込められてしまった、と信じた。その結果、西欧化によって活気づけられたもっとも創造的な精神がユダヤの帰属集団を離れることだ、と考えられたことにより、文化的な大出血が生じたのである。アハド・ハアムは、このようにユダヤ性から離れるのではなく、かつての生命力と創造性へと民族精神を復興させ、ユダヤ的召命の近代的民族主義版を形成することによって、再びユダヤ人を互いに結びつけることがユダヤ的民族主義の第一の任務となるべきだ、と考えた。

アハド・ハアムの見立てによれば、ユダヤ教は非常に保守的である。なぜならユダヤ人は国家を失ってから何世紀にもわたって、律法と儀礼という壁を立て、厳格な自己隔離によって自分たちの独自性を保持してきたからである。

その結果、ユダヤ人は近代性から遅れをとってしまった。[24] だからこそユダヤ教のルネッサンス・宗教改革・啓蒙主義らは、すべてまとめて十八世紀後半から十九世紀にかけてやってきたのである。ところがアハド・ハアムは、ユダヤの民族主義を、啓蒙主義的価値との調和の流れに置く。[25] さらにいうならば、彼が意図するユダヤ教に必要とされるものは、マイモニデスに見られるような理性の自律、つまり外的な権威への従属から理性が解放されることであり、[26] 信仰と啓示の重要性を拒否することである。彼は「理性の優越性」（一九〇四年）のなかでマイモニデスを採り上げ、そこで繰り返し、外的な権威ではなく人間理性を解放するよう主張している。[27] 筆者はその姿勢が、非常に独特であるという印象をうける。なぜならアハド・ハアムは、西欧の啓蒙主義という形式で、近代性と出合ったことによってよろめいているユダヤ教の危機を治癒する唯一のものとして、いわゆる文化的なシオニズムを考案するからである。それをハンス・コーンは、彼は無神論的（agnostic）ヒューマニストであり、ユダヤ民族が生得的に持っている道徳的優位性に着目し、啓蒙主義的で知見のある民族中心主義に基づいた信仰を持っていた、[28] と表現している。またジャック・コーンバーグは、アハド・ハアムは「神に取って代わるものとして、民族をユダヤ史の中心に据えた」[29] と解釈している。さらにコーンバーグは、ブーバーとの比較によって、両者の思想的差異を、次のように明白に説明している。

> 彼の主要な弟子マルティン・ブーバーの宗教的ロマン主義は、アハド・ハアムの理性主義や世俗主義者の倫理とは、ほとんど同じものではない。[30]

こう評価されるように、アハド・ハアムの発想は極めて非宗教的であり、むしろ理性的に民族の現状解決を考案するヒューマニスト／啓蒙主義者に近いと考えることができる。それは彼の弟子マルティン・ブーバーが、ヘブライ語聖書を根拠としたシオンの理念を導き出し、聖書が希求する神の王国をシオニズムのなかで実現しようと試みる立場と

は真逆のものである。そしてアハド・ハアムが民族主義者ないしは民族中心主義者と評されるように、彼は民族の歴史性と現実性を的確に洞察するなかで、その問題と解決案を提案した人物であった、と筆者は考える。

三、精神的中心とはなにか

アハド・ハアムは、「ユダヤ人国家とユダヤの問題」（一八九七年）と「模倣と同化」（一八九三年）のなかで、精神と身体に関して「大昔、預言者の時代に、わたしたちユダヤ人は身体的強さを軽蔑し、精神力のみを尊重するよう習った[31]」と述べている。ユダヤ民族がこの原則に忠実である限り、ユダヤ人の実存は安全であった。というのも精神的力のなかでは、ユダヤ民族は他の諸民族には劣っておらず、たとえどんなに自分たちより強い敵と衝突したとしても、ユダヤ民族が自己消滅する理由はなかった[32]。このようにアハド・ハアムは、ユダヤ民族が武力に勝る敵に囲まれながらも、消滅することなく生きながらえてきた理由はその精神力にあった、と考える。ところが政治的シオニストたちの理想は、民族の文化に拠ることがなく、精神的な偉大さにたいする忠誠心ではなく、物質的な力や政治的支配の成就をとおして栄光の道を見いだす傾向にあった。アハド・ハアムによれば、そのような発想は「ユダヤ民族と、過去を結ぶ糸を切ることであり、ユダヤの歴史的土台を削り取ることである[33]」。政治的シオニストの偉大な指導者たちは、ユダヤ教から精神的に程遠くなってしまい、もはやユダヤ教の本性とその価値にたいする真の概念を持っていない。したがって、彼らが理想とするユダヤ人国家というものは、いわばユダヤの人種によって構成されるドイツ人やフランス人の国家となにも変わらない。それはかつてパレスティナを支配していたヘロデ王のように、民族の文化

が軽蔑・迫害され、異邦人の神殿や円形劇場の設立によってローマ文化をその国に植えつける力のなかにあるのと同様である。[34] アハド・ハアムによれば、政治的シオニストはまさに西欧的価値観を基とした西欧的国民国家の設立を試みているに過ぎず、彼らが望むユダヤ人国家とは、西欧化したディアスポラのユダヤ人による西欧文化の建設だと映ったのである。実際にヘルツルは、ユダヤ人国家での公用語としてヘブライ語を推奨せず、それぞれの出身地の言語使用を求めた。なぜなら彼は、多言語国家スイスを理想モデルとして考案していたのである。このようにヘルツルには、ユダヤ性を極力棄て、近代的自由市民として生きる西欧的価値観が強かった、と筆者には感じられる。

アハド・ハアムは一九〇七年にエッセイ「精神的中心」を執筆した。その理由は、彼が提唱した「ユダヤ民族の『精神的中心』になる運命にあるのはパレスティナである」というスローガンに対して、数多くの誤解が見られたためである。たとえば、あるジャーナリストが「わたし〔アハド・ハアム〕が独占的に『精神的』であり、わたしの理想がパレスティナに『天国のようなエルサレム』を建設しようとしている」[35]と書いたことは完全に嘘であり、このように精神を理解されていることに驚きを隠せない、とアハド・ハアムは一九〇四年にM・エーレンプライス（Ehrenpreis）に宛てた手紙のなかで語っている。その驚きの理由を、彼自身は「もしこのようなものをわたしが本当に理想とするならば、わたしはパレスティナの入植という実践的作業にこれほど多くの時間と労力をかけてこなかったであろうし、自らの能力を最大限に使って、パレスティナにおける農業的居住という方法を研究することもなかったであろう」[36]と述べている。アハド・ハアムの実践的運動については後述する予定であるが、彼は精神的中心という表現を唱えたことによって、非現実的な理想主義者と受けとられていた。彼は、この点に関して多くの誤解や批判を受けていたため、本エッセイではその弁明に労力を要している。それは彼の手紙のなかで、より具体的に語られている。「あなたも、わ

たしの『精神的中心』が、ただ『精神的な』制度だけを構成するものだ、と想像している人たちの一人のようだ。これはまったくの間違いである」（ロンドン、一九一二年七月二十五日、ヤッファのM・ディーゼンゴフ（Dizengoff）宛て）[37]。アハド・ハアムが常に述べてきたメッセージは、「シオニズムは『精神的な』運動である」というものであるが、それは彼に言わせれば「目的と目標との関連においてのみ『精神的な運動』なのである」[38]。すなわちシオニズムは、前記で言及したようなただ入植を推進するような物質的なユダヤ人問題を目的にはできない、ということがアハド・ハアムの真意であろう。

さらに、レオン・サイモンは、次のような明確な視点を提供している。

アハド・ハアムは、「中心」を「影響を及ぼす源泉」という厳密な意味で使っており、それゆえ彼の「精神的中心」が意味するものは、精神的影響の源泉（それは政治的もしくは経済的影響とは異なるものとして）であり、完全に精神的なもの、すなわち非物質的もしくは「この世的でない」ものが予期されるような中心ではない[39]。

またアハド・ハアムは、中心という語を「円」系図をモデルにして、相対的な用語として使っている。それは周縁（ディアスポラ）あっての中心（パレスティナ）であり、同様に、パレスティナという中心なくして、現在のディアスポラ（周縁）は成り立ちえないのである。彼は「『父』が子どもなくして考えられないように、『中心』は『周縁』なくして考えられない。そして父がただ彼の子どもとの関係のなかでのみ父であるように、〔中略〕中心はそれ自身の周縁との関係のなかでのみ中心である[40]」と表現している。

すなわち精神的中心の焦点は、「精神性」ではなく、その「中心」の方にある。彼にとっては、中心が外縁へと影響を及ぼすことが大切なのであり、空想的な精神性を重んじていたわけではない。彼はユダヤ民族の大部分が「断ち切

られた部分[41]」になっている現状のディアスポラを問題視した。そしてエルサレムという一つの部分が、離散ユダヤ人たちの中心となることを望み、民族の身体である拡散した肢体すべてが、民族の心臓の鼓動を聞く時、その故郷での生活が回復される。それは肢体が、心臓から流れてくる生きた血の流入を歓迎するかのことである。[42] ちなみにサイモンによれば、「中心」という語を人々は取り違えており、その理由はこの「中心と外縁との関連性」を見ていないからである。

四、パレスティナかディアスポラか　農業的入植

それではアハド・ハアムが掲げる精神的中心は国家を要求しないため、単純に政治的シオニズムと対比され、ディアスポラ的生き方を肯定するものであろうか。答えは、もっと複雑である。コーンバーグによれば、アハド・ハアムはロシアのポピュリズムに影響を受け、一八九一年と一八九三年にパレスティナへ調査に行き、新たなユダヤ人社会にとってのポピュリスト的声明文のような報告書を出している。そこでアハド・ハアムは、土壌と身体的労働への愛によって展開されるユダヤ人の小作人による自給自足型の農業社会を思い描いている。彼がこのようにパレスティナで小規模の農業的入植によってユダヤの民族的生の再建設を試みたことを、レオン・サイモンも言及している。[43]

興味深い点は、アハド・ハアムが述べる「もしも民族の中心が純粋に精神的なものであるならば、それは実在しえず、生活の新たな形を作り出しえないことは明白である[44]」という一節にある。すなわち彼は精神的中心を、何か空想的／抽象的なものではなく、具体的生活とつなげて考案しているのである。アハド・ハアムは、ディーゼンゴフ宛て

の手紙で、如何にして精神的中心が農業とつながるのか、それについて次のように言及する。

農業的入植とわたしたちの仕事の他のすべての物質的側面は、わたしにとって『精神的中心』にはなくてはならない部分である。〔中略〕なぜなら農業的入植はユダヤ民族の精神全体への影響力をまちがいなく発揮するからである。[45]

このように農業へ従事することが、パレスティナという精神的中心の形成に必要不可欠である、と彼は表明している。その理由は、農業のための入植が、ユダヤ民族の精神へと影響を及ぼすからである。ただしアハド・ハアムは、具体的な経済政策を提案する形で、農業的入植を推進しているわけではない。むしろ理念的なレベルで議論を展開したにすぎず、彼自身自らの考えを「楽観的[46]」だと認めてもいる。したがってこの手紙のなかでも、「真のヘブライ的人格をもつ者の大勢が入植するようになれば、たとえ彼らが排他的にユダヤ人労働者を雇わなくても、ユダヤ人の生活に多大な影響を与えるだろう、それは疑いえない[47]」と続き、ディアスポラのユダヤ人労働者全体に対して大きな影響を与えるに違いない何か模範となるようなヘブライ的人格が要求されているのだ。

アハド・ハアムがパレスティナで「農業」を推奨していた理由は、たしかに初歩的形態の農業では世界市場の大部分を頼ることはできない、と彼自身理解しながらも、それでも農業ならばその従事者たちに、多くではなくても食糧を供給できるからである。彼は「もしユダヤ人国家が物質的問題に苦しんで捕らわれているユダヤ人のすべて、もしくは彼らの多数を救うことに着手するならば、彼らを、パレスティナで農業従事者（agriculturalist）へと転身させることによって、まず必要となる資本を見つけるに違いない[48]」と主張する。ここでアハド・ハアムは、農民という語ではなく、アグリカルチャリストという表現を使っている。この語が意味するものは、農民でありながらなおかつ農業

経営知識を持ち、農場を運営でき、自給自足に励む農家である。国富がとても小さく、民族のほとんどが貧困ラインよりも下位であることを知った上で、ユダヤ人の移住にとって「農業を基盤としたパレスティナ入植[49]」が必要だ、と彼は考えていたのである。次の一節は、その事態がよくわかるものである。

わたしたちがパレスティナに建設せねばならないものは、「経済的かつ精神的」な中心である。[50]

このように彼は精神だけでなく、明確に経済という表現を用いており、それは彼の思想を解釈する者たちにあまり伝わっていない点でもある。ただし彼には「国家の経済的中心[51]」として具体的に農業による生産や販売などが想定されていたわけではない。筆者には、パレスティナの経済システムが、全世界に離散するユダヤの人々に適応される理念的イメージの典型であった、と思われる。

アハド・ハアムは「精神的中心」執筆後、*Summa Summarum*（一九一二年）のなかでも「国への愛だけでは農業従事者を生み出すことはできない、というのも『地』への愛が同様に求められるからである[52]」と、農業従事者にたいする変わりない考えを述べている。このように自身と「地」が強く深く結びつき、貧困に耐え地から離れるよりも負荷を負った家畜のように生きることを望む者が、真正の農業従事者であると言及される。ただし彼は他方で、精神的中心は、ユダヤ民族による真のミニチュアでなければならず、その中心には「ラビであろうと学者であろうと著述家であろうと、農民であろうと手工芸者であろうとビジネスマンであろうと」、ユダヤ人の正真正銘のタイプでなければならない[53]、と複数の職業を認める発言もしている。この点に関して、バトニツキーは次のようにまとめる。

アハド・ハアムにとって、パレスティナにユダヤ的な集合的生を作りだすことこそ、ユダヤ教とユダヤ人とを蘇生することができる唯一の道であり、この点が文化シオニズムの核心である。[54]

この引用のなかから、文化シオニストで争点となる概念が「集合的生」と「パレスティナ」であることが示唆される。バトニツキーは、ヘルツルと政治的シオニストが国民国家という「外的な」政体を建設することを求めたように、アハド・ハアムはユダヤ人とユダヤ教の道徳的問題の解決を、大量入植を進めるようなユダヤ人国家建設は否定しながらも、漸次的な地への集合は認めていたのである。

五、ブーバーの解釈

アハド・ハアムの思想は、様々なシオニストや研究者に影響を及ぼしており、それぞれが彼からある部分を受け入れながらもある部分は異なったアイデアを生み出していった。[55] その一例として、本人がアハド・ハアムを師匠と呼んでいるマルティン・ブーバーは、彼から多大な影響を受け、類似したシオニズム思想を展開しながらも、食い違うこともあった。ブーバーは文庫本として刊行された *Israel und Palästina*[56] のなかで、シオニズムの理念や先行するシオニストたち[57]の評価を行い、そのなかの章「中心についての教え（アハド・ハアムに関して）」で「アハド・ハアムと政治的シオニズムとの本質的差異は、パレスティナを要求する度合いの大きさにあるのではない」[58]と言及し、両者の争点が、単にパレスティナかディアスポラかでは決着しないことを示唆している。政治的シオニストにとっての目標は国家設立であり、シオンとは大勢を鼓舞するためのいわば神話であった。[59] 一方、アハド・ハアムの「ヒバット・シオン」[60]（シオンの愛）にとっては、パレスティナという精神的中心から、周縁地域への影響という目標があり、そこに国家が占める場所などないのである。

ただしアハド・ハアムはパレスティナにユダヤ人共同体を創設しようと励んでおり、そこで彼が「ユダヤ人国家」という用語に対して抗議していなかったことも確かである。[61] ブーバーに言わせれば、政治的シオニズムにとって、ディアスポラの将来は、パレスティナにユダヤ人共同体が生じるか否かにかかわらず問題があった。なぜならディアスポラ社会が絶滅する傾向にあると見なされていたからである。他方、アハド・ハアムにとってディアスポラの将来は、ユダヤのパレスティナの将来に依拠していた。それは物質的存在としてのパレスティナに限らず、言うまでもなく「希望」が存在するか否かの問題であった。[62] だからこそ強くて生産的な共同体に集中した世界のユダヤ人が、物質性と同時に自分たちの精神性を保つことができるのである。それゆえアハド・ハアムにとってディアスポラとパレスティナは、政治的シオニズムにとってそうであるような二つの異なる領域ではなく、一つの身体である、とブーバーはこのエッセイで表現している。

まとめにかえて

ここから筆者が考えることは、アハド・ハアムは、ディアスポラ推奨かパレスティナ入植推奨かというあれかこれかで自分の立場を表明していないということである。基本的に彼は、パレスティナという理念的な精神的中心を発信することで、ディアスポラ・ユダヤ人に対して、士気・統一・ユダヤ人として生きるための適切な内容という影響力を与えることが主眼であった。それに加えて、物質的にパレスティナが実在することによって「希望」としての精神的中心が形成される、とブーバーは考えた。またアハド・ハアムは、農業的居住地を作るというアイデアを同時に持っ

ていたが、世界中のディアスポラ・ユダヤ人が皆パレスティナに入植することにたいして、それが物理的に不可能であるという理由から、懐疑的であった。

すなわち、この議論をまとめるならば、次のコーンバーグの解釈になろう。

彼〔アハド・ハアム〕の「精神的中心」という概念のなかで、シオンにおける新たな民族的ユダヤ文化が、ディアスポラのユダヤ人をも同じく養成するであろう。[63]

これはパレスティナに確かな精神的中心があってこそ、周縁のユダヤ教文化を養成することが可能となる発想である。アハド・ハアムは、同化によって失われつつあるディアスポラのユダヤ教「文化」に危機感を抱いていた。アハド・ハアムの思想が、文化的と言われる所以は、この点にある。彼にとって、ユダヤ人が居住地のヨーロッパ文化に順応してユダヤ性を放棄することと、パレスティナへの大量入植によって先住民族の生活を武力によって驚かせることは、ともに受け容れられない事態だった。

ちなみにサイモンは、アハド・ハアムの精神的中心という考えが失敗することは、予め運命づけられていたことであり、その理由はこの用語があまりにも論理的であり、彼の真意を読者たちが正しく理解できないからだ、とも述べている。[64] 筆者がアハド・ハアムの文章を読んで感じることは、彼の説明が論理的というよりは抽象的かつ概念的であって、具体性に乏しい点である。アハド・ハアムは、このように理解されることを不快に思ったため、「精神的シオニズム」という名称を嫌った。[65] 彼はあたかも机上で論じているようであり、一体どのようなものが内実として周縁地域へと影響を及ぼすのかは不明瞭である。ディアスポラのユダヤ教が分離・解体の危機にあるため、パレスティナという中心から、それらの精神的な紐帯となる影響力が必要だという点は、彼の発言からよく理解できた。その一方で、具

体的内容が語られていないため、話が形式的なアイデアに終始している。

最後に、アハド・ハアムはヘルツルのような政治的リーダーもしくはまとめ役ではない。むしろ「民族的な教育者、道徳の教師であり、民族主義的運動の初期段階、それは民族主義的な知識人が民族の文化的再興を語るような時であるが、そのような場面でしばしば登場する案内役（ガイド）である」[66]と、コーンバーグは彼を評価する。筆者が興味深く感じたことは、ナショナリズムの誕生には、必ずこのようなタイプの著述家が登場することである。アハド・ハアムのアイデアは、シオニズムの実現可能性という成功の物差しで測れるものではない。むしろ彼は、知見のある人文主義的な学者であり、大きな理念を抱いて、政治家や思想家に対して方向性を示した案内役であったのだろう。したがってアハド・ハアムは、政治の場で実践し、実現されたか否かではなく、後輩世代にどの程度影響を与えたか、また人文／社会科学研究のなかで、どの程度鋭い洞察を提供したのか、そういった視点から評価されるべきである。

註

（1）Walter Laqueur, *The History of Zionism* (New York: Tauris Parke Paperbacks, 2003), 162.

（2）民の一人という意味のペンネームで執筆していたロシア出身の理論家シオニストで文筆家。本名はアシェル・ギンズベルグ（Asher Ginzberg, 1856-1927）。

（3）op. cit., 163.

（4）Hans Kohn（1891-1971）、ブーバーの弟子で「シオニズムはユダヤ的なものではない」を、一九二五年に書いている（マルティン・ブーバー、合田正人訳『ひとつの土地にふたつの民』みすず書房、二〇〇六年、七三―七九頁参照）。

（5）Ahad Ha-'am, *Selected Essays by Ahad Ha-'am*, trans. from the Hebrew by Leon Simon (Philadelphia: The Jewish Publication Society of America, 1912). 本稿ではこの書籍に収録されている論文からの引用はない。

（6）Ahad Ha'am, *Nationalism and the Jewish Ethic -Basic Writing of Ahad Ha'am*, ed. & intr. by Hans Kohn (New York: Schocken Books, 1962), 68.

(7) op. cit., 69.
(8) ibid.
(9) op. cit., 71.
(10) アハド・ハアムによる文化的シオニズム思想の焦点は、世界中のディアスポラ・ユダヤ人をパレスティナに移住させることが物理的に不可能であることを表明したかったために、政治的シオニズムと相容れなかったのである。彼は、パレスティナへの入植を積極的に進めていたグループを「プロレタリアのシオニズム」と呼び、彼らが東欧の労働ユダヤ人人口全体をパレスティナに移動させようと試みる考えを「空想にふけっている」と表現する。なぜなら彼らはパレスティナに、かなり広大な民族的経済システムを作り、ディアスポラの産業からはじき出されたすべてのユダヤ人のために部屋と仕事を提供することを約束していたからである。Ahad Ha-Am, *Ahad Ha-Am: Essays, Letters, Memoirs*, Philosophia Judaica, trans. from the Hebrew & ed. by Leon Simon (Oxford: East and West Library, 1946), 207.
(11) Ahad Ha'am, *Nationalism and the Jewish Ethic*, 72.
(12) Leora Batnitzky, *How Judaism become a Religion -An Introduction to Modern Jewish Thought* (Princeton & Oxford: Princeton University Press, 2011), 148.
(13) Ahad Ha'am, *Nationalism and the Jewish Ethic*, 74.
(14) ibid.
(15) op. cit., 75.
(16) ibid.
(17) op. cit., 76.
(18) op. cit., 77.
(19) ibid.
(20) Jacques Kornberg, "An Introductory Essay," in *At the Crossroads: Essays on Ahad Ha-Am*, xvi.
(21) 宗教・言語・民間伝承・社会倫理などすべては、この民族精神の産物である。
(22) Hans Kohn, "Introduction," in *Nationalism and the Jewish Ethic*, 17. 彼ら多くのシオニストたちは、故郷への愛着や特定の土壌との根づきが精神の独創性にとってほとんど神秘的な基礎であると理解していた。
(23) Jacques Kornberg, "An Introductory Essay," in *At the Crossroads*, xvi.
(24) op. cit., xvii.
(25) op. cit., xviii.
(26) Achad Ha-am, *Ten Essays on Zionism and Judaism*, trans. from the Hebrew by Leon Simon (London: George Routledge & Sons, Ltd., 1922), 209.
(27) op. cit., 211.
(28) Hans Kohn, "Introduction," in *Nationalism and the Jewish Ethic*, 17.

(29) Jacques Kornberg, *At the Crossroads*, vxi.
(30) op. cit., xix.
(31) Ahad Ha-Am, *Ahad Ha-Am: Essays, Letters, Memoirs*, 71; Ahad Ha'am, *Nationalism and the Jewish Ethic*, 79.
(32) Ahad Ha'am, *Nationalism and the Jewish Ethic*, 79.
(33) op. cit., 80.
(34) ibid.
(35) Ahad Ha-Am, *Essays, Letters, Memoirs*, 287.
(36) op. cit., 287.
(37) op. cit., 290.
(38) ibid.
(39) Leon Simon, "Introductory Note," in *Essays, Letters, Memoirs*, 201.
(40) Ahad Ha-Am, *Essays, Letters, Memoirs*, 203.
(41) op. cit., 204.
(42) ibid.
(43) Leon Simon, *Ahad Ha-Am -A Biography by Leon Simon* (New York: The Jewish Publication Society of America, 1960), 122.
(44) Ahad Ha-Am, *Essays, Letters, Memoirs*, 287.
(45) op. cit., 290.
(46) ibid.
(47) ibid.
(48) Ahad Ha'am, *Nationalism and the Jewish Ethic*, 71.
(49) ibid.
(50) Ahad Ha-Am, *Essays, Letters, Memoirs*, 206.
(51) op. cit., 208.
(52) Achad Ha-am, *Ten Essays on Zionism and Judaism*, 146.
(53) Ahad Ha-Am, *Essays, Letters, Memoirs*, 206.
(54) Leora Batnitzky, *How Judaism become a Religion*, 157.
(55) アハド・ハアムの思想は、文化的シオニズムを形成する中心思想として、後のシオニストに多くの影響を与えた。アメリカ・シオニズムにたいする影響について、次の論文を参照せよ。石黒安里「一九〇〇年代から一九二〇年代における文化的シオニズムのアメリカ化 ――アハド・ハアム受容のプリズムとしてのマグネス、カプラン、カレン――」『一神教世界』第九号、同志社大学一神教学際研究センター、二〇一八年、一一一頁。
(56) これらのエッセイを含んだ単行本は『イスラエルとパレスティナ』(一九五〇年)であり、二〇一八年に刊行された新版著作集(Martin Buber Werkausgabe)の第二十巻に「アハド・ハアム、ベルリンでの追悼」(一九二七年)と併せて収録されている。また新版著作集第三巻に「精神的中心」(一九〇二年)、「ユダヤ教に関する三つのスピーチ」(一九一一年)、「釣り合いをとる者」(一九一六年)らのアハド・ハアム論が収録されている。

(57) モーゼス・くズ、レオ・ピンスカー、テオドール・くルツル、ラビ・クツク、A・D・ゴードンら。

(58) Martin Buber, *Martin Buber Werkausgabe 20: Schriften zum Judentum*, hrsg., eingeleitet u. kommentiert von Michael Fishbane & Paul Mendes-Flohr unter Mitarbeit von Simone Pöpl (Gütersloh: Gütersloher Verlagshaus, 2018), 297.

(59) op. cit., 298.

(60) くルツルによって一八九七年に創設されるシオニスト組織に先行するシオニスト運動で、パレスチナの地へのユダヤ人入植を目的として一八八三年に、帝政ロシアを中心に創設された。Cf. *At the Crossroads: Essays on Ahad Ha-Am*, ed. by Jacques Kornberg (Albany: State University of New York Press, 1983), xiii.

(61) Martin Buber, "The Doctrine of the Centre (On Ahad-Ha'am)," *On Zion -The History of an Idea-*, tr. by Stanley Godman, The Martin Buber Library (Syracuse: Syracuse University Press, 1997. Originally Published by Schocken Books in 1973), 143; *Martin Buber Werkausgabe 20: Schriften zum Judentum*, Ders., 297.

(62) ibid.

(63) Jacques Kornberg, "An Introductory Essay," in *At the Crossroads*, vii.

(64) Leon Simon, "Introductory Note," in *Essays, Letters, Memoirs*, 201.

(65) Ahad Ha-Am, *Essays, Letters, Memoirs*, 208.

(66) Jacques Kornberg, "An Introductory Essay," in *At the Crossroads*, xv.